

なきごえ



1974

2

大阪市
天王寺動物園協会

動物と私

上村 淳

幼稚園だったか小学校に通っていた頃か、母やお手伝いさんに連れられてゆくところと云えば京都動物園に決っていた。もちろん私のたつての頼みであった。今の様に遊園地化していたわけではなく鳥や動物と一緒に居たかったのである。とりわけ鳥や小動物が好きでじっと眺めていたものである。猿は好きではなくましてゴリラやオランウータンは大嫌いであった。今もその趣向は変わらない。

園の奥の方に大きい池を取り込んだ放畜舎があって、よく馴れた丹頂鶴や、白鳥や、鷺鳥が雑居して家から用意してもらってゆく餌をねだって集ってきたものである。

その禽舎の横にうどん屋さんがあって一家族が住っているらしかった。多分同年配であったと思うが、その家の子供が私には羨ましくて仕方がなかった。朝起きたらいつも庭に鳥が居る。日曜日には一日中一諸に遊んでいられる、そんな生活にたまらなく憧れていたのである。

私の家にも父が画材として飼っている小鳥や鳩や、或る時は狐や山羊さえ居た。けれども小さい小屋に閉じ込められていると云った感じで、私にはさして遊ぶ相手でもなく、なじめなかった気がする。

戦時中、餌料がなくなり狐は動物園へ、山羊は母の里に連れられていったが、鳩や小鳥は居た。早春のある日、駒鳥の入った竹籠を掃除していて、あやまって逃してしまった。すると駒鳥は泉水に浮んでいた八重樫に止って水あびを始めた。私はその美しかった光景が忘れられず、後年絵のモチーフにしばしばなっている。

蛙の子は蛙のたとえ通り、芸大に進んで花鳥画家の道を歩むようになったのはごく自然のなりゆきであったかも知れない。しかし同じ家から主任教授と生徒が通学する事にいき、かの抵抗を感じて、当時空き家になっていた平城山の父のアトリエに住むようになった。

父が啖禽荘と名付けたように、野鳥が沢山やってくる丘陵の一軒家であった。桃畠に、雉子の親子が遊び、犬の餌を狐が一諸に食べに来るようなどころである。電気や電話こそ引いてあったが、井戸辺で洗いのをし、新聞も来ないのんびりとした生活であった。

休日には全く他人と顔を合わせる事のない日であつた。



たし、鏡を見るわけではないから、人の顔を見ないと云った方がよいかも知れない。

宅地開発の波はこ、も例外ではなく最近ではアトリエから松林越しではあるが隣家の屋根がみえるようになった。今年は特に野鳥の渡りが少なくなったようで淋しい。瑠璃鳥のつぶらな瞳を見る日も少ないし、四十雀、目白の群もいさ、か小型である。

学生の頃写生に通っていた動物園で錦鶏の卵をもらい、孵化させたのが病みつきになり私の家族は500余にふくれあがってしまった。好きで好きで仕方がないから、この極道楽は止みそうもない。近日、白雁が仲間入りするはずである。六曲屏風に描いてみたいと思っている。

三月になれば、先ず山鶏が産卵するであろう、それから、唐山鳥、白鷗、腰白山鳥と続くはずである。今年こそは仕事の量を減して、鳥の世話に力を入れたいと思っている。

(京都市立芸術大学 助教授・日本画家)

表紙の写真説明

ニホンザル、

冬の朝はさすがに寒いのか、サル山のニホンザルは3匹、4匹と体を寄せ合っています。春は早くこないかなあーといたげです。



“ヒグマ”

永らく見合い中だったヒグマが、正月の初めから同居しています。じゃれあったり写真のように立ちあがってお客さんに愛きょうをふりまいています。

動物と私	2
ヒグマ	3
動物園グラフ	4・5
日本狼のミズカキについて	6・7
動物園と教育	8
飼育係とはなんだろう	9
世界の動物園長からの便り	10
動物園ニュース	11

動物園グラフ

“プレイリードッグ”

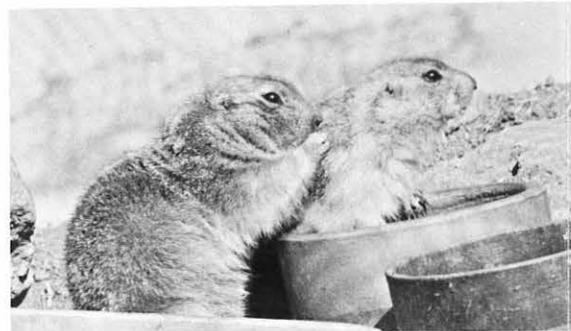
今回は、プレイリードッグの生態について写真で御紹介します。プレイリードッグは、アメリカの平原にすむ動物で、特殊な生態が見られます。土の中に立派な巣を造っているのですがそこまでは写真にはとれませんが、巣の回りでのプレイリードッグの表情を追ってみました。



↑ チョコ、チョコとよりそって夫婦らしい2匹が仲のよいところを見せる。



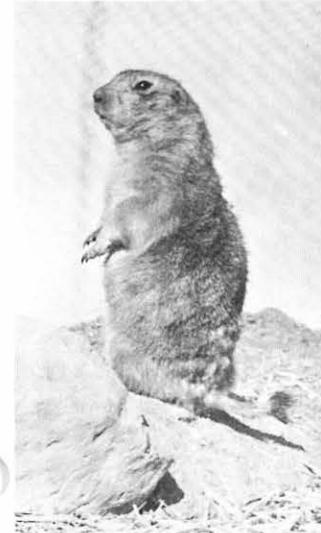
← 身づくろい
やはりかわいた平原育ちなので、この間の記録的雨なし続きには、調子が良さそうでした。



↑ エサはリスと同じように手でもつようにして食べます。



← 穴の入口で何やら愛情の交換。



← 独特のポーズ
こんなかっこうをして、巣のまわりであたりを見わたします。



↑ 仲よく巣の入口で物音のした方に注目している夫婦。



← 穴ほり
後足でどどん土をけり出します。

← 巣のまわりは土もりがあって、雨水が入りこまないようになっている。



12・1月の動物園日記

- 12/24. スプリングボックが一番入園しました。雌の方は輸送の疲労か、かなり衰弱しているようなので治療しています。
セイランの雌が1羽入園しました。
27. ゴリラが2匹共下痢をしているので治療しています。
29. 先日入園したスプリングボックの雌は、かなり元気になりましたが、検便するとたくさんの線虫が居ましたので駆虫することになりました。

30. リカオンの雄が食欲もなくなり、元気もありませんので治療を始めました。
31. 今年最後の日にメンヨウが1頭生まれました。
- 1/1. キソウマが寒さと老令のため痙攣症状をおこして元気ありません。
2. 正月早々に、ライオンが3頭出産し、シロテナガザルも1頭と、おめでたが2件ありました。
4. 元旦からきょうまでに、10万人をこえる入場者がありました。
5. 大阪駅前でカラカラ（たか的一种）が保護されたので、当園で預かって世話をすることになりました。

7. 治療中のリカオンは尿石症の疑いがあるので、本格的に尿石症に対する治療を始めました。
9. 昨年入園した2頭のシロクマを運動場で同居させました。
10. オジロワシが翼端より出血していたので治療しました。今まで一緒にしてなかったヒグマ2頭を、寝室で同居させました。
12. アカカンガルーとサイの交尾がそれぞれ確認されました。
14. アシカが2頭（オス、メス）入園しました。これは大阪動物愛護会より寄贈されたものです。

16. オオサイチョウが羽根を痛めて治療中でしたが、衰弱が激しくて死亡しました。
18. ビューマが出産しました。赤ちゃんは2頭で哺乳も良好です。例年9月頃に出産するのですがちょっと珍しいことでした。
19. ヤマアラシの歯が伸びすぎているので切っていました。
20. キングペンギンが右足の爪をひっかけて、少しびっこをひいているので治療しました。マングース（メス）の寄贈がありました。
21. やっと雨が降り園内の樹木もや・生気をとりもどしたようです。

日本狼のミズカキについて

笠原 宏也

読書子にとっては待望久しい『奈良市史』全十五巻が次々に刊行されているが、その自然編には面白い日本狼に関する古記録が集載されている。

『多聞院日記』では永禄十二年（一五四九年）三月に、オオカミが増えて奈良の神鹿をくい殺し、病気の乞食にも襲いかかったと記し、また文久元年には武野紀重保が鹿を殺す狼を鉄砲で射ちとり米一石を褒美にもらい、捕えた狼は猿沢池の近くに竹矢来をめぐらし、その中へハリガネで釣って生前の姿のままにさらしと記録している。

ところで私の興味をひくのは、その狼についての観察であるが、「狼はゴマ毛にして尾は細く猪の尾の様に、猪の尾より長く、口は狐の様に口とがり目大きくて鋭く、足は上の付け際に折れ、下は犬より上にて折れ、ケ爪は犬より二寸程上にあり、足の指の所々には犬よりはるかに大きく水懸けはこれ無く」とあることである。

ここでいまいしこの文章を詳細に分析してみると、なお面白いことが発見される。まず「狼はゴマ毛にて」であるが、赤ゴマ、黒ゴマを問わずこれは疑う余地のない日本狼の特長であるが、次の「猪の尾」のようで、しかも長いというのは、犬の尾のように毛が皮膚角度と並行に寝てはいなくて、皮膚角度に直角にたつという野生獣の特質を示したことであろう。目や口吻の観察も間違いのないところであるが、その次の足は「上の付け際に折れ、下は犬より上にて折れ」ているのは、前肢の肘関節の位置が高くて（上膊骨の前傾が強く）前腕骨が長く、中指骨（愛犬家は今日、これを繫と称んでいる。）もまた長いということであろう。そして「足の指」が犬よりはるかに大きいということは比較の問題にすぎないが、重要なのは「水懸けはこれ無く…」とあることである。（「ケ爪」のことはここでは前肢第一指のことと考え、後述したい。）

古来、日本狼にはミズカキ（水掻き、または蹠と書いた。）があると伝承され、今日でもそれを信じている人があるが、当時において日本狼と犬との区別は、このミズカキに拠ることが多かったと思われる。私も一昨年夏、紀州の太地で地元のインテリ青年から「紀州犬にはミズカキがありますからねエ」と自慢されて、とび上るほど驚いたことがある。この紀州犬のミズカキ説は既に昭和八年、柳田国男博士の『狼のゆくえ』によって世に紹介されている。

「本草啓蒙を見ると、狼は足に蹠（水掻き）あって能く水を渉る。豺には蹠無くして水を渉ること能はずとある。是などもどうして実験したものか、訝かしいことであるが、果して日本の事実であるならば、多分多くの野獣を捕ったという猟師の話というのを伝聞したもので、しいて信ずるに及ばぬことのように私は考えて居た。ところが近頃になって、熊野出身の絲川恭平という人から、始めて紀州太地の灰買船の犬には、水掻きがあるという話を聞いたのである。或は、海を遠ざかった吉野の山村にも、此種が分布しては居ないか。否、寧ろこちらの方が元で、熊野へ下って行って利用せられたのだということが、何かのはづみに、もしや、証明されることになりはしないか。気をつけて居てもらいたいという話を鷲家口の座談会でした。珍らしい話だから自分の聞いた通りを、筆録して残して置きたい。一体に熊野の船乗たちは、水を泳ぐ犬を調宝してよく飼って居る。入海に臨んだ山々に狼をする人も、犬が泳いでくると、何かにつけて便利だから、懇望して其種を太地から引いて飼って居た。絲川君は年少の頃英国に遊学し、或時、同窓の学生と狼犬の話をした序に、自分の郷里には足に蹠のある犬が居るということ告げたと、笑って一人も之を信ずる者が無かったそうである。それが口惜しいので、わざわざ郵船の事務長とかに依頼して、その犬を頭熊野から倫敦へつれて来てもらった。まだ小さな仔犬で到着後まもなく死に、それが又、足の趾間の半分までしか皮膚が伸びて居なかったので、完全な説明にならずにしまったのは残念だったというが、とにかく是が僅か三十年足らず前の事なのだ。

この論文の冒頭にも狼と豺の二種類が出てくるが、これについて和歌山大学の末松四郎教授のご研究を借りながら古文献学的にみてみよう。

最も古いのが一六三一年、林羅山が書いた『新刊多識編』で、これにはたゞ狼と豺を別のものだとしているだけであるが、一六五九年に刊行された西道智の『写記物語』になると、「豺は説文にいう狼の属なり。豺に二種あり。大なるを豺狼といい、小なるを豺奴という」わけで、どうも中国文献の直訳の感が深い。豺は今日ではアカオオカミかジャッカルだと考えられているらしい。

時代は少し下って一六九五五年刊の『本朝食鑑』になると狼には蹠があり豺にはないと記され、一七一三年発刊の『和漢三才図会』にいたっては、著者の寺島良安が狼と豺には距があるので犬とは異なると

書いている。いまだにこの距の意味は分からないが、『本草綱目啓蒙』（一八〇三年）になると狼には蹠があって、よく川を渉り、豺は犬と同じくそれがないと説明している。

このように見てくると、いかにも日本狼は二種類あったように思われるが、幕末になるとこれら中国的な教養人とは異って、西洋の知識人による科学的な日本狼観察が登場してくる。

文政九年（一八二六年）かの有名なシーボルトがオランダ商館長の随行で江戸へ上ったときの旅日記『江戸参府記行』の中に「狼（オオカミ）一匹と 豺（ヤマヌ）一匹とを買い入れた。」と記している。オオカミとヤマヌのどこが違うのかは分からないが、シーボルトの助手であったブリュゲルは手記の中で、これらは同一物であろうと書いているのは注目してよい。

このように日本狼に二種類あったろうことは、最近になっても、早稲田大学の直良信夫教授が、大著『日本産狼の研究』で古骨の研究から推定しておられ、東京科学博物館の今泉吉典博士も、「分類学的には謎の動物である。」と二種類説を裏付けられている。しかし、この二種類の狼が日本にいたとしても、これらがただちに狼と豺であり、その何れかに蹠があったという証拠にはならない。現在信じられる唯一の日本狼の剥製標本（和歌山大学蔵）にももちろんミズカキはないのである。

それではミズカキ伝承はどこから生まれたのか。これに迫るために、いままでの文献や古骨の研究による方法を捨てて、民俗学的なアプローチを試みてみたい。

現代にミズカキ伝承を甦らせたのは柳田国男であるが、その弟子である千葉徳爾氏のご研究（『狩猟伝承研究』）と、前岐阜大学々長今西錦司博士の採集された伝承を集約してみると、一応のミズカキ伝承の発生が、つかめるのではないと思われる。

それらによると、一般的に信州、遠州方面に棲むのはヤマヌであり、オオカミは海岸や島などに棲むものだと考えられており、具体的には紀伊半島から南西日本方面がオオカミの棲息地だということである。

越後方面にももちろんこの伝承があるが、いずれにしても海に近い土地に狼が棲み、ミズカキがあるというわけである。千葉徳爾氏はここで「紀州でミズカキと呼ぶのはケツメであることは確からしい。」と重大な結論を下すのである。最初に紹介した古文

書にもケツメがあったが、ケツメは奇・偶蹄目の動物の場合に使うものであり、犬科動物のケツメというのは、犬界の専門用語としても、慣用語としても、使用されていないので分からないが、日本犬研究家の渡辺肇氏が紀州犬に多い狼爪（距）について書かれていることから後肢第一趾をケツメと解するものと、想像する。（『愛犬の友』誌。昭和四六年五月臨時号）渡辺氏によると「これ（狼爪）を、岩かは、みずかきなどといい、これを純血の証明のごとくいわれたり、特殊な役目をするごといわれるも、これは他犬種にもまもあり、日本犬であることとに關係がない。」と記され、さらに「狼爪は退化の遺物にすぎないものであって、益なく、かえって歩行を乱すものである。」とし、日本犬標準にも注意をして「距は成る可く除去すべし。」とあるのである。ケツメとは狼爪のことであり、狼爪は「距」であり、距は犬の後肢第一趾が退化して飛節の内側の上部に残った爪のことである。この爪は運動の際反対側の後肢をよく傷つけるので、愛犬家は仔犬のときに根元を緋糸でしばって自然に除去するものである。ところがこの爪を引っぱると後肢飛節との間に日本犬中型成犬ならおよそ三厘もの膜ができるので、これをミズカキとして犬に特殊な能力を期待したのであろう。ときたま発生する、この犬の尾骶骨のような無用の爪が紀州犬に多く、これまたときどき紀伊山塊で捕獲される狼にも同じ爪が見られたのが人間の想像力を刺激したに違いない。

それでは狼爪がなぜミズカキと称ばれるようになったのか、それについてもやはり民俗学的な推察を加えてみたい。

狼は牧畜民俗にとっては、牛や羊を襲う敵であったが、農耕民族である日本人にとっては田畑を荒らす猪や鹿を追う益獣であった。しかし農耕より比較的漁撈にたづさわる海岸近くの人々にとっては、狼にもミズカキを与えることによってその能力を海上にまで延長させ、あるときは豊漁を約束してくれる靈獣にまつり上げ、またときには海路の安全や海上交易の守護神にしたのではないだろうか。柳田国男の「灰買船に乗った狼」は、そのような背景があって生まれたものであろう。

私は、いま、ここまで推論したうえで、あとは諸賢のご批判を仰ぎたいのである。

神戸市葺合区磯上通五ノ三公団五〇一号

動物園と教育

社団法人 日本動物園水族館協会

会友 山本鎮郎

旧制中学で私は1年に植物、2年に動物、3年に鉱物、4年で生理衛生、5年で博物通論というのを習った。動物ではサルもゾウも昆虫も魚も全部一通り分類学的な説明のしてある教科書を使った。そして5年間同じ先生だった。50年近くも昔のことである。

現在はどうかだろうか。中学の教科書にゾウやサルは、でて来ないようである。その代り発生とか進化とか、遺伝だとかむづかしい生物学上の問題が講じられているようだ。

それも結構である。しかし私どもは哺乳綱霊長目ヒト科に属するレッキとした動物である。親類ともいべきサル、日常生活になくはならぬウシやブタ、ニワトリ、家庭のペットであるイヌやネコのことは、幼児絵本にまかせきりという、此頃の教育課程にはいささか疑問を抱かずにはいられない。

自然保護という言葉は、最近では耳にタコができ、目に目バチコができるほど見聞きしているが、現在の学校で「自然」が十分に教えられているとは思えない。微小的なことに目をうばわれて、肝心の身近な動物や植物に対する知識らしいものが身につけていないのがほんとうではあるまいか。テレビの「自然のアルバム、や「野生の王国、などの番組で断片的な知識を得ているというのが真相ではあるまいか。

動物園は、学校や家庭では学ぶことのできる動物

に関するまとまった知識の与えられる野外学校であるべきである。この際紀元前12世紀頃から800年位つづいた中国の周王朝の時代に、いろいろな鳥獣が飼育され、「知識の園」といわれていたことを想起したい。又、アメリカの学校では、動物園見学が必要な課程におりこまれ、動物園から動物を貸出したり、移動動物園を組織して、学校を巡回する等のことが行なわれていることも留意したい。

動物園も、今後はショウ的な展示だけを売りものにせず、小中学校との間に強力な協同関係を保ってほしい。

もともとわが国の動物園は、その教育活動が欧米の動物園に比べておくとされてもいる。欧米の動物園では、各国ともりつぱな案内書を作り、中には動物学の教科書のようなものもあり、各家庭にぜひ1冊とよびかけてもいる。(ニューヨーク・ブロンクス動物園、セントルイス動物園等)

動物園は博物館法という法律の中で、博物館相当施設と認められている。ということは、動物園が地域社会と密着して、社会教育の重要な役割を担っていることを示すのである。

動物園のラベルや解説等、今後動物園で自然の一環としての動物に対するまとまった知識が得られるよう、一そう改良されるべきものがある。

市が多額の経費を投じて、動物園を営んでいることの意味を、お互いにもう一度考え直して見たいものである。(大分市高崎山世界鳥獣館勤務)

飼育係とはなんだろう

大野尊信

日本中には水族館を含めると実に100以上もの動物園があります。中にはさまざまな動物園があり、広い規模、収容点数の多い動物園、珍しいコレクションをほこる動物園から田舎の町にほんの少しの動物を収容している動物園まであります。私達動物園で働く者は動物園のレベルを大きさとか収容数の多いことなどで、それを見がちになるのですが、動物園にとって本当に一番大切な事は何でしょうか。もちろん飼育技術が高度であるということはいうにおよびませんが、動物達を見せる施設であるからには、人々が動物達をみることによって心に何かを感じ、動物達の生活をみてほのぼのとした気持ちがわいてくるような動物園、ほんとうに動物達が大切にされているのだなあ、そんな気持ちがわくような動物園が一番の動物園ではないかと思えます。その意味において、飼育係はどんな動物を担当していてもその重要性においてなら遜色はないと思えます。野生動物が自然界とは違った環境の中で、しかも、かぎられた空間の中で、その能力を充分発揮することなく、それでも動物が生き、子供を生み育てる生活をしている。それはそれでいいことではないかと思う。もちろん動物園関係者や飼育係員は、常に自然界とのあまりにも大きいギャップを考えずにはいられな

いし、矛盾に悩むことも多い。動物達が一方的に人によって管理され、直接的にはかぎられた飼育係によってそれがなされているということは、その動物の一生を左右する重大な要因となっているのです。動物舎がどんなにすばらしい設備であっても、いい飼料を与えられていても飼育係に心がなければ、いい飼育は絶対に出来ないと思えます。動物を見にくる人々は、飼育係員が、彼らの世話をしている毎日の作業の中にも心を感じる事が出来るし、彼らの名前を呼んでやる、体にふれる、あるいは、動物によっては、乗ったり、抱いたり共に遊ぶ姿を見て、動物園に来た価値を見つけることが出来る。現在の動物園がまだまだ動物達を正しく見せていないし、動物園は人間の為である要素が強い中で、私達は動物の側にたち、両者の間の仲介の役目をしなければならぬと思えます。現在の様に自然保護問題が強く考えられている時、動物園はその立場を考えなくてはならない。しかし、そこに動物園があり、沢山の動物達が生きている。その為には正しい飼育をし、彼らの為に努力をしてやる事が一生を動物園で生きる彼らに出来る唯一のつぐないではないでしょうか、彼らが、その一生を終えた時、動物園での一生もまんざら悪くはなかったと思ってくればいいのですが……(動物園飼育係)

動物園

世界の動物園長からの便り

昨年日本で開かれた国際動物園長連盟会議に出席し、会議後、私たちの園を訪問された世界の動物園長さんから次々と便りが届いています。そこで、そのうちから天王寺動物園の訪問の印象を書いていただいた2~3通を御紹介しましょう。

◎……このたび貴動物園と知り合いになり、特に喜んでます。貴動物園については特に印象深いものがありました。同行した他の方々もきっと同じことだと思います。これは、キウイとか、シロタヌキのような特殊な動物あるいは珍しいもののせいばかりではなく、動物園の全体のアレンジとともに非常に印象深い多種多様の動物のコレクションのせいだと考えます。貴動物園では、非常に興味深い方法を取っておられます。それは、動物の生態にもとずいて動物舎を細分化したり、猿の2つの檻を橋のようなもので連絡したりされておりまして、サイやキリンのようなすばらしいグループについては申し上げるまでもありません。アフリカカンムリヅルのすばらしい交配の成功は記憶に生々しいものがあります……。

西ドイツ デュイスバーグ動物園長 ゲバルト

◎……天王寺動物園訪問は、私にとって特に興味深いものがありました。と申しますのは、貴動物園は、フランクフルト動物園と状況がよく似通っているからであります。当動物園もまた、市立でありまして、大きなビジネス街の中心に位置いたしております。当動物園が、第2次大戦中に周辺のアパートとともに、英国空軍によって完全に爆破されたのが、整備の唯一の好機でありました。このようにして、当動物園は、被災跡数ブロックにわたって拡張され古い動物舎は新しいものに再建されました。

しかし、フランクフルトの中心地で、入園者が常時、動物の背後に高層建築物を眺めなければならないような非常に狭い地域に動物園を設けることは長期間にわたっては不可能だと考えております。もっとも、当動物園はあたかも或る程度自然の環境で野生動物を飼育し展示しているように見せかけています。従って、市外の広い地域に当動物園の第2部門を開設すべく、こ、数年間作業を行ってまいり、現在では、これが実現することになりました。建設はすでに、開始されていますが、最終的には完成まで、数年ないし数10年か、りましょう。この動物園の第2部門は古いものの8倍の規模になります。両方の動物園で同じ動物は展示せず、広いスペースを必要とする動物の大半を古い動物園から移すことになっています……。

西ドイツ フランクフルト動物園長 ワイメック

◎……日本滞在中すばらしい貴動物園を見学でき家内ともども厚くお礼申し上げます。当日午後は貴施設で大いに楽しませていただきました。サイの交配が一行をよろこばせたことは当然で、あの交配が成功してサイが一頭増えることを期待しています。

貴動物園のツルの交配記録や、大きな放し飼いのおりの中でのシュバシコウのすばらしい交配飼育方法はまさに印象深いものでした。私個人としてはあの美しいフタコブラクダと元気なキリンが特にすばらしいと思いました。

貴動物園には我々一行にとって非常に興味深いものを沢山持っておられます。貴動物園の動物は非常に健康でよく管理が行き届いていることについて敬意を表します。

ワシントン国立動物園長 テオドル、H、リード

従来の剥製イメージを 一掃!!

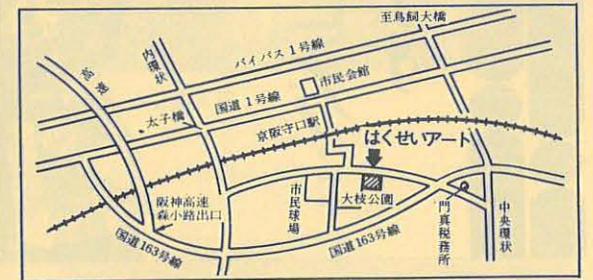


★各界注目の研究グループ! (TV出演)

はくせいアート

株式会社 スガワ製作所

TEL 992-6497



グラウンド乾燥のパイオニア登場!!

どんな雨あがりでもすぐ試合、練習OK!!

10分でグラウンド、コートがカラッとします。

Hi-Dri ハイドライは独得の強力吸湿性と

ザックリした感触で

雨後のグラウンドを引締め、運動技能を損う不愉快なぬめり、ベタツキを除きさっと散布するだけで晴天のようなグラウンドコンディションを造りあげます。



輸入販売
株式会社

エンドル

北事務所 大阪市北区伊勢町9番地 TEL (06)364-3149

本社 大阪府守口市東光町3丁目3番地 TEL (06)996-2245(代)

夢が広がるシヨツピング…
近鉄がお届けします



近鉄



動物園ニュース

☆正月のおめでた2題

1月2日にライオンが3頭生まれました。両親は父がタカシ、母がユキで、ユキは昭和37年生まれで、今までに20頭以上の子供を産んで育ててきたベテランのライオンです。きっと3頭共無事に大きく育ててくれることでしょう。



☆アシカ2頭入園

1月14日、オス、メス各1頭のアシカが大阪動物愛護会からの寄贈で入園しました。2頭共30kgに満たない子供なので、状態をみながらアシカ池の多勢の仲間と一緒にする予定です。



同じ日にシロテテナガザルも1頭の赤ちゃんを生みました。まだ毛も十分はえていない赤裸なので、母親が胸にしっかり抱きしめて授乳しています。この夫婦は昭和46年6月にも雄1頭を出産しており、2度目の出産です。

☆クマの同居2題

昨年の10月と11月にそれぞれ入園したシロクマ(共に2才の雌雄)は、今まで寝室でオリ越しに見合せていましたが、新年早々の1月9日に運動場に一緒に放しました。まだ子供のため、けんかもせず仲よく同居に成功しました。

続く1月10日には、やはり別々に収容していたヒグマを寝室で同居させ、12日には運動場に一緒に放しました。今まで運動場には1頭ずつ交代で出していたので、いつも退屈そうにしていたので、その日からは運動場狭しと、じゃれあって仲よく遊んでいます。

☆カンムリヅルの親子

人工育芻してすっかり大きくなったカンムリヅルのひなは、日中は親のカンムリヅルにまもられて餌を食べたり遊んだりしています。人工育芻したにもか、わらず、親子の愛情が切れることなく続いてよく面倒をみたりしていますのでまことにほ、えましいものです。



なきごえ 昭和49年2月15日発行 (毎月1回15日発行) 第10巻第2号(通巻103号)

編集/大阪市天王寺動物園

発行人/大阪市天王寺動物園協会 和田辰巳

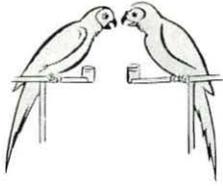
印刷所/株式会社 松村善進堂

〒543 大阪市天王寺区玉水町2

電話 大阪 (06)771-0201

振替口座 大阪 37823

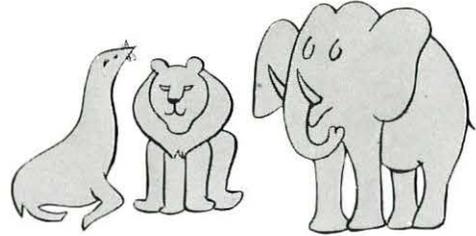
定価100円(送料共) 1年継続(12部)1,100円(送料共)



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

- ・医学実験用動物
- ・愛玩犬、猫直輸入
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・教材用鳥獣剥製販売
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券150円・鳥獣価格表100円



有限会社 吉川商会

本社 神戸市生田区中山手通三丁目二八番地 電話(078)221-8195・221-1517
飼育場 神戸市葺合区神仙寺通三丁目一番地 電話(078)241-3494



自然の
おいしさ

全糖

- 合成甘味料・合成保存料・合成糊料・合成着色料はっさい含まれていません。



雪印ヨーグル

パイン・オレンジ・フルーツカクテル

各140c.c.=60円

編集委員

〈小谷 潔・林 邦彦・大野尊信・加幡一男・米田敏光・樽本 勲〉
〈田上 勝・中川道朗・農本武志・深井和美・東 政宏〉